Japanese Association for Religious Studies

その錯綜性・多様性は同寺院の運営史に立ち現れる。例えば、当該出自集団の語り、寺院の教義や儀礼そしてその出版物に留まらず、州政府と寺院との裁判記録やその新聞報道、及び寺院の反対団体や擁護団体なども挙げられる。当然、研究者のサティー解釈もその重層的な「語り」の一部とみなされるべきだろう。それらを丁寧に取り上げ、いかに相互に絡み合っているのか明らかにすることが求められる。研究者のサティーへの価値判断や自らの解釈を押しつけることなく、ラーニー・サティー（に関わる人々）をめぐる言説の重層性を検討することは、通常アグラワールの「生」や「記憶」として一括りに定義される危険性を避けつつ、断片化された諸言説を丁寧に咀嚼するためには、有効な手段と言えるのではないだろうか。

インド民衆神話における救済
――カルキ・プラーナを事例として――

渡邉　たまき

本発表では、ヒンドゥ教の民衆的終末神話である『カルキ・プラーナ』を題材にして、そこにあらわれる「救済」の諸相をみることによって、「救済」神話における特徴を考察した。

黙示録においてイエスが軍団を率いて悪魔を滅ぼし、王国を建てるとあるように、カルキ・プラーナにおいても救済は、強い王によってもたらされる。人々を脅かす悪の軍勢として描かれているのは、カリ・ユガの化身であるカリ王の他に、仏教徒たちの国や、蛮族などである。カリ・ユガに入り、法や秩序、ヴェーダの神々が重んじられなくなっていくなかで、「暗黒の」勢力が力を増し、正しい教えを守るバラモンたちは追放されていく様子が描かれる。こうした物語と叙事詩との違いは、カルキが世界を新しく創りなおして人々を救うとされている点である。原初の神話にあって、インドラが竜を退治して世界を成り立たしめたように、この世界を新しく始めさせるという仕事こそがカルキの救済だといえる。神話的意味でいえば、聖なるものが顕れるということ自体が救済なのであるが、その意味で、カルキがこの世にあらわれたということ自体で、救済は完了しているといえる。コスモゴニーによる救済は、カルキ・プラーナにおける救済の本質的要素である。

一方、七世紀に南インドから発生し、十五世紀には北インドに広がったバクティといわれる宗教運動において、伝統的なヴェーダの宗教とは異なった救済の思想が展開された。バクティは、民衆に広まっていた宗教文学の中に広くみられる宗教的態度であり、カルキ・プラーナにみられる救済を論ずる上で、バクティの考察を欠かすことはできない。カルキは敬虔なヴィシュヌのバクタであるヴィシュヌ・ヤシャのもとに生まれるとされ、ヴィシュヌ派のバクティの影響にあることが示される。カルキの説くバクティの理想は、カーストやダルマの優位性が否定されるものではないが、カリ・ユガにあってそうした理想が失われた時代だからこそ、ヴィシュヌの化身が要請されたことが伺える。一般に救済とは原罪のように聖なるものとの断絶を

NII-Electronic Library Service

Japanese Association for Religious Studies

前提にしている。敢えて自ら神への愛、信仰を求めるバクティも同様に、断絶を前提にしているといえるといえる。

ユガは一般には時間論として扱われているが、カルキ・プラーナにおいては、詳細な時間論はそれほど主題化されない。むしろユガは、カルキという人物の活躍を生き生きと語るための、物語の背景として用いられている。カリ・ユガでは、それまで良いとされていたすべての規範が廃れてしまうが、それは調和した世界としてのコスモスが、機能不全におちいっていることを示している。カリ・ユガというのは、こうしたコスモスの機能不全が、かなりの程度継続する時代のことである。カルキ・プラーナにおけるユガ論で重要なのは、現在がカリ・ユガであるという認識、つまり救済の場としてのカリ・ユガの重要性であると思われる。

救済は、それを待ち望む状況とひと組になっている。つまり「救われていない」という認識があって初めて問題になる出来事である。こうした状況を前提としたうえで、救済とは端的にいえば、神の出現のことである。神が出現し、人がそのなかにおいてはじめて生きることができる世界（コスモス）が新たに作られることを、救済というのである。これは、神話時代においては、繰り返されてきたコスモゴニーの儀礼と構造的に同じである。

救済は、永遠回帰的コスモゴニーの儀礼と、カルキ・プラーナにおける救済との違いは、「救われていない」という認識の有無にある。待望された神の出現によって世界が作り直され、断絶が回復するというのが、民衆的神話の救済の特徴であるといえる。

NII-Electronic Library Service